

看護学生の主体性に関する文献研究

—主体性を育む教育方法を考える—

新井清美 竹内久美子 木暮孝志 林美奈子 石光芙美子 古谷剛 小澤麻美

(Kiyomi ARAI Kumiko TAKEUCHI Takashi KIGURE Minako HAYASHI
Fumiko ISHIMITSU Tsuyoshi FURUYA Mami OZAWA)

【要約】

看護学生の主体性を育むためには、看護基礎教育特有の教育方法を踏まえた検討が必要である。そのため、本研究では『看護学生の主体性』の捉え方と『看護学生の主体性』の内容を明らかにすることを目的とし、文献研究を行った。医学中央雑誌webを用いて「学生」、「主体性」をキーワードに該当した47件の文献を質的記述的方法を用いて分析した。その結果、『看護学生の主体性』として【課題の設定】、【解決方法の模索】、【責任ある行動】、【成長の実感】、【決定する力】の5つのカテゴリーが抽出された。その中でも【決定する力】がその他の4つのカテゴリーに影響し、かつ、これらが循環することで主体性を育んでいくことが可能となる。ゆえに、『看護学生の主体性』を育むためには、この一連の流れを止めることなく循環させていくことが重要である。また、今後の課題として、本研究で抽出したカテゴリーについて再度、吟味・精選し、主体性そのものの測定内容と方法を検討することが必要である。

キーワード：看護学生、主体性、教育方法

I. はじめに

人口動態の変化に伴いわが国の保健・医療・福祉の体系が変化している。それに伴い医療へのニーズが多様化しており、看護に対する社会からの期待は質・量ともに高まっている。このため、看護師の育成においても、その年限の長期化の検討のみでなく、教育の質の向上・保障が重要視されている。看護基礎教育の現場では、講義、学内演習、臨地実習という形態を活用し、知識・技術の習得と専門職業人として自ら判断し、主体的に看護活動を営むことが求められている¹⁾。

看護学生の主体性を育む教育に関するこれまでの研究では、教員の関わり方の検討²⁾、実際の学習過程や成果からの検討³⁾、指導者と看護学生の認識の差異についての検討⁴⁾がみられた。いずれも、主体性を育む教育方法として、学生の興味・関心を高めるための関わりや、学生自身が自己の成長を実感できるような関

わりといった学生への教員の関わり方について検討されていた。特に臨地実習や学内演習のような少人数の学生との関わりが、多く取り上げられており、成果が確認されていた。このことから、看護学生の主体性を育む教育方法には、看護基礎教育特有の授業形態が活用されることが不可欠であり、看護基礎教育特有の教育方法の検討が必要である。

しかしながら、看護学生の主体性についての定義や、看護学生の主体性そのものを記述している文献はなかった。看護学生の主体性を育む教育方法について検討するためには、これまでの先行研究から、どのように看護学生の主体性を捉えているのか把握する必要があると考えた。そこで本研究では、これまでの看護学生の主体性を取り扱った先行研究から、『看護学生の主体性』がいかなる内容であるのか、また、その測定方法にはどのようなものがあるのかを把握することを

目的とした。

Ⅱ. 研究方法

1. 対象文献の抽出

医学中央雑誌 Web で 1999 年～2010 年に公表された論文のうち、キーワードとして「学生」「主体性」を含む原著論文 68 件を抽出した。その内、論文が本研究の目的である学生の主体性の趣旨に合致した論文 47 件を分析対象とした。

2. 文献の分析方法

データ化には研究者間で検討・作成した分析フォーマットを用いた。対象文献を精読し、主体性とは何か、主体性をどのように測るのかについて整理した。次に、主体性について記載された内容の趣旨をコード化し、類似性・関連性に基づきサブカテゴリー、カテゴリーとして抽出した。

Ⅲ. 結果

1. 研究の動向

1) 文献数の推移

文献検索の結果、47 件の文献を抽出した。文献数の推移を図 1 に示す。2 年毎に区切り、推移を見ると、1999・2000 年は 4 件であったが 2001・2002 年では 5 件、2003・2004 年では 6 件、翌 2005・2006 年では 10 件、2007・2008 年では 13 件となっており、2008 年までは増加の一途をたどっている（図 1）。

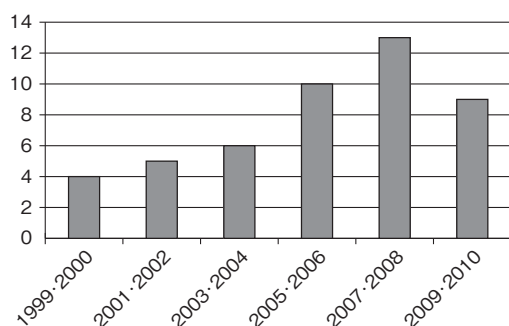


図 1 文献数の推移

2) 研究の対象

看護学生を対象とするものが最も多く 36 件（78%）、次いで助産学生、大学生・大学院生、薬学生を対象とするものが各 2 件（4%）であった（図 2）。

3) 研究で取り上げた場面

臨地実習の場面が最も多く 14 件（28%）、次いで集団を対象とした実技演習の場面が 10 件（20%）、集団への講義が 4 件（8%）、少人数でのグループ学習であるチュートリアルが 3 件（6%）であった（図 3）。尚、複数の場面を取り上げた文献が 6 件（12%）であった。

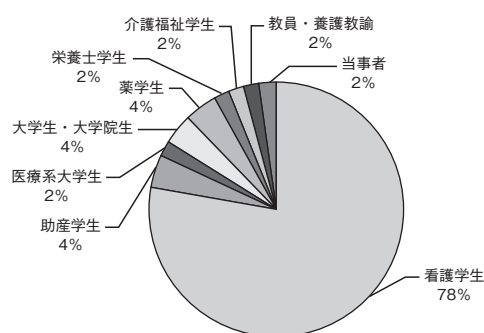


図 2 研究の対象

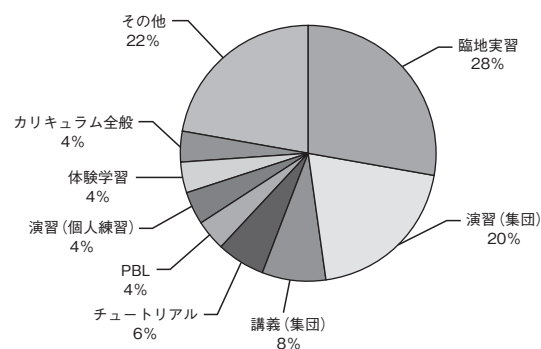


図 3 研究で取り上げた場面

2. 主体性とは何か

主体性について定義された論文 23 件（48.9%）から、【課題の設定】、【解決方法の模索】、【責任ある行動】、【成長の実感】、【決定する力】の 5 カテゴリーと 12 サブカテゴリーが抽出された（表 1）。以下、【 】内はカテゴリー、『 』内はサブカテゴリー、「 」は論文内の具体的記述を示す。

表1 カテゴリー・サブカテゴリー表

カテゴリー	サブカテゴリー
課題の設定	課題の明確化
	興味・関心の広がり
解決方法の模索	取り組みへの足固め
	解決への手段
責任ある行動	目的達成への決意
	自己の選択した方向へ動くこと
成長の実感	成果の実感
	経験からの変化
	自己との対話
	思考の芽生え
決定する力	自己決定
	自信の喚起

1) 【課題の設定】

『課題の明確化』、『興味・関心の広がり』の2つのサブカテゴリーで構成された。

『課題の明確化』では、「自ら課題を設定」すること、「自ら課題を明らかにすること」等を含む。また、『興味・関心の広がり』では「認識の広がり」や「知識の工夫した活用」等からなっている。

2) 【解決方法の模索】

『取り組みへの足固め』、『解決への手段』の2つのサブカテゴリーで構成された。

『取り組みへの足固め』には、「自発性を基盤として、対象の疑問とその本質を把握する力を持つこと」、「看護専門職として看護を改革していく力となる」、「自己責任を持って判断する能力を身につけていくこと」、「自分の対象との間に生起する事柄に完全に注意を集中すること」等がある。また、「疑問を解決するための手法を持つこと」、「思考錯誤を繰り返し、自分自身で最良の方法を考えること」等が『解決への手段』に含まれる。

3) 【責任ある行動】

『目的達成への決意』、『自己の選択した方向へ動くこと』の2つのサブカテゴリーで構成された。

『目的達成への決意』には、「自己の立場において選択し、考え、感じ、行動するところの構えがあること」や「自分の意思・判断によって自ら責任を持って行動する態度のあること」、「情動コントロールする中、確

実な技術が習得できるよう取り組むこと」等があった。また、「目的とする技術の習得に向けて自ら基礎知識を獲得し、自己課題を遂行できること」、「学生の力だけでやり遂げること」、「自己の意思・判断によって自ら責任を持って行動すること」等が『自己の選択した方向へ動くこと』に含まれる。

4) 【成長の実感】

『成果の実感』、『経験からの変化』、『自己との対話』、『思考の芽生え』の4つのサブカテゴリーで構成された。

『成果の実感』は「自らの行動の評価」、「学習効果の確認」がある。『経験からの変化』は「実戦経験の意味への気付き」、「自己認識の変化」が含まれる。また、「看護学生の自己成長を助ける」、「自己の啓発」等が『自己との対話』に含まれ、『思考の芽生え』には「あるがままに自分と対象との間に生起する事柄を受け取り続けるという意志」や「思考力の発揮」からなっている。

5) 【決定する力】

『自己決定』、『自信の喚起』の2つのサブカテゴリーで構成された。

『自己決定』では、「責任ある決定」や「自らの意思決定」、「自らの意識決定」がある。また、『自信の喚起』には、「選択への自信」や「自己効力感の喚起」が含まれる。

3. 主体性の測定方法

主体性の測定用具について記載された論文は11件(23.4%)であった。主体性の測定には「主体的に学ぼうとする姿勢」、「進路決定プロセス尺度」、「独自性欲求尺度」、「行動姿勢」、「子ども用主体性尺度」、「やる気を引き出す18の視点」、「アイデンティティ尺度」、「PILテスト」や、独自に作成した質問紙等を用いていた(表2)。

表2 主体性の測定方法

主体性をどのように測るか
主体的に学ぼうとする姿勢について、とても身についた～あまり身につかなかったまでの5件法で学生自身が回答
質問項目は、明示されているが、下位概念の分類の記載がないため、内容は不明確。測定方法は非常に当てはまる～まったく当てはまらないの4件法
進路決定プロセス尺度6件法の回答形式
学生に対して、主体的に取り組めましたかという問いで、「十分取り組めた」「取り組めた」「取り組めなかった」の3件法の回答形式
アンケート調査であるが、学生の認識を問う形式であり、「自発的な学習ができたか」を5件法で回答する形式
性質、能力、趣味、行動傾向などが他人と異なっていた、あるいは異なっていることに満足感を感じる欲求である独自性欲求尺度。32項目8因子からなり、1～5点で採点される
行動姿勢の中の意欲や態度、関心、思考の仕方、行動の仕方
「積極的な行動」「自己決定力」「自己を方向づけるもの」「自己表現」「好奇心」の5つの下位尺度から構成される子ども用主体性尺度
やる気を引き出す18の視点を参考に作成した質問紙
アイデンティティ尺度
PILテスト (Purpose in Life Test)

Ⅳ. 考察

1. 主体性の内容

本研究では、看護学生の主体性のカテゴリーとして物事に興味・関心を持ち、自らの課題を明らかにして取り組むための【課題の設定】、設定した課題に対する【解決方法の模索】、自己の設定した課題をやり遂げるための【責任ある行動】、自己の行動を振り返り、評価することで得られる【成長の実感】、自らの課題を設定し、成長を実感するまでのプロセスにおいて求められる【決定する力】の5つが抽出された。

看護学生は卒後、看護師として判断能力や問題解決能力を発揮していくことが求められる。そのために、看護基礎教育において、自ら判断し、問題解決していくための知識・技術・態度を身に着けることが必要とされる。その第1段階として学生は、物事に興味・関

心を持ち、自らが取り組むべき【課題を設定】する。この段階において教員は、学生のレディネスや学習習熟度に応じた具体的な助言をすることが必要とされている。次に、第2段階として、自己の設定した課題に対して試行錯誤を繰り返し、自分自身で最良の方法を考え【解決方法の模索】をする。そして、第3段階として、自己の設定した課題をやり遂げるための【責任ある行動】をとり、第4段階として自己の行動を振り返り、評価することで得られる【成長の実感】をする。1～4の各段階において、学生が自ら判断し、決定していくことが必要となり、【決定する力】が大きく影響を及ぼしていると考えられる。片山²⁾は、学生の発言を待つ姿勢は、間接的に、自然に学生の能力が引き出され、学生の力だけでやり遂げる主体性に影響を与えているとしている。また、鈴木は、学生は仲間と関わり、思考や情動が動くとその中で知識や技術を定着させている。そのため、学生の思考をフィードバックし、行為にいたる思考の過程を浮き彫りにしていく働きかけをすることが求められている¹⁾と述べている。教員は学生のレディネスや学習習熟度に応じて支援の方法を工夫しながら、学生が自信を持って自己決定できるよう、【決定する力】を培う支援をしていくことが求められる。これらのプロセスにより、学生は自身が設定した課題をやり遂げたという成功体験を持ち、このことで自信が高まり、主体性が促進していくのではないだろうか。

2. 主体性の測定方法

主体性の測定には、「主体的に学ぼうとする姿勢」、「進路決定プロセス尺度」、「独自性欲求尺度」、「行動姿勢」、「子ども用主体性尺度」、「やる気を引き出す18の視点」、「アイデンティティ尺度」、「PILテスト」や、独自に作成した質問紙等が用いられていた。今回の分析対象の文献からは、本研究で抽出された要素から考えて主体性そのものを測定する尺度は活用されておらず、看護学生の主体性に関する測定方法は、模索段階にあると考えられる。

今後、本研究で抽出された看護学生の主体性の構成要素である、【課題の設定】、【解決方法の模索】、【責任ある行動】、【成長の実感】、【決定する力】について測定方法を検討していき、再度主体性の内容を吟味・精選し、主体性そのものを測定することを試みるのが課題である。

3. 主体性を育む教育

これまでの結果から、看護学生の主体性を育む教育については、その特徴的教育方法である講義・学内演習・臨地実習の特性を活かしながら実践していることが明らかとなった。講義では、演繹的に実施するだけでなく、個人およびグループによる課題を達成する形式が多く実践されている。具体的な方法としては、Problem based learning（問題基盤型学習：以下PBLと記す）やグループでの演習が含まれていた。学内演習では、技術演習や看護過程を用いた演習も含まれており、グループや個人で課題を達成することが可能な形式であった。もっとも多く活用されていた臨地実習では、さまざまな試みがなされていた。これらの授業形態の活用に関して順序性を明示している文献はみられなかった。しかし、先行研究の学習段階などを考慮すると、講義・学内演習のグループでの学習を活用し、学生間で協力し合いながら学生自ら課題を設定し、その課題に取り組むことで主体性を促進させる基礎的な力を育むことができるものと考えられる。そして、学生のレディネスや学習習熟度に応じた教員の支援により主体性が促進される。これらを繰り返すことで学生は成功体験を持つことができ、【決定する力】を育んでいくことに繋げることができるといえる。そして、学内での過程で育まれた【決定する力】を基盤に、臨地実習において、主体性を促進する仕組みをつくることが重要である。

また、看護学教育は、講義、学内演習、臨地実習という授業形態の組み合わせでカリキュラムが構成されているため、それぞれの特性に合わせて主体性を育む方略を検討する必要がある。講義や学内演習においては、集団やグループで課題達成に取り組むだけでなく、臨地実習において学生が課題を設定し、問題解決する基盤を形成するために、学生個々を対象としたPBLや課題の個人ワークを取り入れる工夫が必要である。また、学生の主体性発展の授業形態として多く活用されている臨地実習では、学生個々への関わりが主軸である。講義・学内演習と臨地実習共通の教育内容としては、授業での達成課題を明確にし、その解決方法、行動を学生が考えられるように支援することである。更には、最後に課題の達成状況を学生が実感し、その成果を確認できる場を提供することが不可欠である。この繰り返しによって、学生の決定する力が成長し、主体性がさらに発展していくのではないだろう

か。入学時からの教育の中で、この一連の流れを止めることなく循環させていき、学生個々の決定する力を成長させていくことが主体性を育む教育といえるのではないだろうか。

V. 結論

看護学生の主体性を育む教育方法について検討するため、看護学生の主体性について研究論文をレビューし分析を行った。その結果、【課題の設定】、【解決方法の模索】、【責任ある行動】、【成長の実感】、【決定する力】の5カテゴリーと12サブカテゴリーが抽出された。【課題の設定】、【解決方法の模索】、【責任ある行動】、【成長の実感】は学生の主体性を育むステップとなっており、その基盤は【決定する力】となっている。主体性が発展するためには【課題の設定】及び【決定する力】に対する学生のレディネスや学習習熟度に応じた教員の支援が重要である。また、講義・学内演習のグループでの主体性の促進の繰り返しにより、育まれた【決定する力】を基盤に、臨地実習において、学生個人を対象とした主体性を促進する仕組みをつくること、授業での達成課題を明確にし、その解決方法、行動を学生が考えられるように支援すること、最後に課題の達成状況を学生が実感し、その成果を確認できる場を提供することが必要である。今後、本研究で抽出された看護学生の主体性の構成要素である、【課題の設定】、【解決方法の模索】、【責任ある行動】、【成長の実感】、【決定する力】について測定方法を検討していき、再度主体性の内容を吟味・精選し、主体性そのものを測定することを試みるのが課題である。

【引用・参考文献】

- 1) 鈴木真由美：初学者の「ベッドメイキング」技術修得の過程における教授—学習方法の構造化。飯田女子短期大学紀要 26. 59-74（2009）
- 2) 片山理恵，内藤直子，白井瑞子：母性実習の主体的グループ学習が及ぼす学生の思考プロセスの検討。香川医科大学看護学雑誌 5. 175-183（2001）
- 3) 横山孝子，大澤早苗，嶋井久美子，高木佳寿美：学習過程の分析からみた学生の主体性の形成に関する一考察。保健科学研究誌 2. 59-68（2005）
- 4) 泉澤真紀：臨地実習における学生と教員の臨時実習教育の評価の差異に関する検討。日本看護学会論文集：看護教育 37. 425-427（2006）
- 5) 安藤高子，森千鶴：臨地実習において学生と『共に学ぶ』ことを再確認した臨地実習指導者の変化。日本看護

- 学会論文集、看護教育 34. 177-179 (2003)
- 6) 藤本悦子, 井尻吉信, 原田昭子, 横山正子: 医療従事者養成教育におけるWeb Forumの有用性—学生主体型の協調学習の構築に向けて—, 形態・機能 4. 3-11 (2005)
 - 7) 濱田伸子, 山下美穂: 「自分でつかむ」という学習姿勢をはぐくむ講義展開—分娩における援助技術獲得の過程における試み(第1報)—, 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要 10. 70-79 (2006)
 - 8) 橋本麻由里, 栗田孝子, 鈴木里美, 野村浩: 「看護専門職であることの理解」に関する学びの検討, 岐阜県立看護大学機能看護学講座: 教育と研究 6. 43-49 (2008)
 - 9) 東谷みゆき, 安藤恵子, 井上千香, 川上佐代, 政平恵子, 福岡洋子: 呼吸理学療法「体位ドレナージ」の教材を工夫した看護技術演習の授業評価, 中国四国地区国立病院付属看護学校紀要 5. 27-29 (2009)
 - 10) 平尾恭子, 山田和子, 熊谷幸恵, 前馬理恵, 堀内恵美子: 在宅看護実習におけるQOLを考慮した看護活動に関する学び, 和歌山県立医科大学保健看護学部紀要 1. 71-78 (2005)
 - 11) 本多陽子, 落合幸子: 医療系大学生の進路決定プロセス尺度作成の試み—進路決定プロセスの類型と職業的アイデンティティからの検討—, 茨城県立医療大学紀要 11. 45-54 (2006)
 - 12) 井出智博, 村山正治: 児童養護施設児童に対する集団療法によるClearing a Space適用の試み—児童養護施設心理職による実践とその効果についての実証的・事例的検討, 心理臨床学研究 26. 35-45 (2008)
 - 13) 飯田耕太郎, 半谷眞七子, 松葉和久, 植上和美: サンフォード大学(英国)薬学部における薬学教育と臨床実習に関する報告, 社会薬学 22. 15-20 (2003)
 - 14) 井野恭子, 鈴木真由美, 伊藤洋子: 「静脈血採血」秘術の修得を促す教育方法, 飯田女子短期大学紀要 25. 85-96 (2008)
 - 15) 石井康子, 泊祐子, 西田倫子: 養護実習における養護教諭の指導の現状と教育上の課題, 岐阜県立看護大学紀要 10. 3-9 (2010)
 - 16) 金岡緑, 我部山キヨ子, 菅佐和子, 千葉陽子: 大学生の内的ワーキングモデルと家族間の情緒的役割関係に対する認知及び生き方志向との関連性, 母性衛生 50. 64-70 (2009)
 - 17) 金田代理子, 岡本美佐江, 平野千穂美, 大橋五輪子, 伊吹はまよ: 学生自身の意思決定と主体的行動の関連—基礎看護学第I期実習後の調査から—, 看護展望 25. 1284-1288 (2000)
 - 18) 北村直子, 平岡葉子, 奥村美奈子: 手術室実習を通して学生が考察した「手術療法を受ける人とその家族への看護のあり方」, 岐阜県立看護大学紀要 7. 39-46 (2007)
 - 19) 菊池和子: 看護学生の人生の意味・目的意識—PILテストの分析より—, 岩手県立看護学部紀要 3. 1-7 (2001)
 - 20) 小山聡子, 罇淳子, 倉井佳子, 菅原真優美, 佐藤信枝: 示範教材で示された行為の理解がその後の実施に及ぼす影響—看護技術演習での効果的な学習を目指して—, 新潟青陵大学紀要 8. 87-97 (2008)
 - 21) 松浦真理子, 大道礼子, 桑田園子, 佐藤聡子, 伊藤恵悟, 満田香: PBLチュートリアル教育を用いた看護過程の演習: 看護学生の自己評価と授業評価による検討, 三育学院短期大学紀要 37. 69-78 (2008)
 - 22) 三浦英子, 増田信代: 教育キャンプにおける学生主体の「組織・運営方法」のあり方—新カリキュラム体制の中で教育キャンプを終えて—, 神奈川県総合リハビリテーションセンター紀要 27. 73-78 (2001)
 - 23) 長尾秀美, 藤山陽子, 田中美穂: 主体性をもつ学習方法—ビデオ撮影を導入して—, 聖マリア学院紀要 15. 25-28 (2000)
 - 24) 永嶋由理子, 野口多恵子: 看護学生の主体性と達成欲求の実態—独自性欲求尺度と達成動機尺度による調査を通して—, 山口県立大学看護学部紀要 3. 53-59 (1999)
 - 25) 永田真弓, 高島尚美, 大賀明子, 田中奈津子, 西典子, 平田明美, 河原智江, 内山繁樹, 服部紀子, 渡部節子, 森山比路美, 藤波富美子, 野知由紀子, 大門幸代: 経験型臨地実習指導者研修会への参加による臨地実習教育に関する主体性の育成, 横浜看護学雑誌 2. 41-47 (2009)
 - 26) 中村恵子, 竹谷英子, 佐藤政枝, 守田恵理子: 学生の自己教育力を伸ばす討議学習の導入とその評価, 名古屋市立大学看護学部紀要 9. 3-11 (2010)
 - 27) 二宮一枝, 坂野純子, 難波峰子, 高玉琴, 時本圭子, 三澤久美子: カリキュラムの相違が看護学生の職業レディネスと自己成長感の関連に及ぼす影響, インターナショナルNursing Care Research 8. 1-10 (2009)
 - 28) 荻原康子: アセスメントモデル示範を用いた小児看護過程教授方法の一考察, 東京医科大学看護専門学校紀要 20. 13-22 (2010)
 - 29) 大平光子, 井端美奈子, 町浦美智子, 古山美穂, 工藤里香, 森川香織, 末原紀美代: 主体的学習態度をはぐくむ教育方法—助産学演習における少人数グループワークの試み—, 大阪府立看護大学紀要 11. 23-29 (2005)
 - 30) 尾池みゆき, 半田陽子: 認知症高齢者を対象にした自己主導型学習法の試み, 広島県立保健福祉大学誌 5. 109-117 (2005)
 - 31) 岡本幸江, 添田啓子, 齋藤貴子, 西脇由枝: 学生の主体性を引き出す小児看護学教育方法・内容の検討, 埼玉県立大学紀要 4. 163-170 (2002)
 - 32) 大本まさのり: 学生の学力に影響を及ぼす自己学習, 北陸大学紀要 31. 61-66 (2007)
 - 33) 大澤早苗: 「絵本の読み聞かせ」を小児看護技術演習に取り入れた有効性, 日本看護学会論文集: 小児看護 36. 134-136 (2005)
 - 34) 小澤絵里, 竹村美恵: 介護老人保健施設での実習における看護技術経験状況と自己評価の実態, 愛知きわみ看護短期大学紀要 6. 93-101 (2010)
 - 35) 酒井美子, 土肥しげ子: 看護学生の精神看護学実習におけるカルテに頼らない情報収集の意義, 気流短期大学紀要 18. 39-44 (2007)
 - 36) 佐々木秀美: 看護基礎教育における技術学に関する若干の考察—学習者参加型学習法を成人看護技術学にとりいれて—, 看護学統合研究 5. 54-60 (2004)
 - 37) 添田啓子, 玉橋貴子, 久木元理恵, 西脇由枝: 学生の主体性を引き出す小児看護学実習方法・内容の検討—学習過程の節目毎の認識の変化に焦点を当てて—, 埼玉県

- 立大学紀要 5. 117-124 (2003)
- 38) 須釜真由美, 井上映子, 今井宏美, 高安百代, 堀之内若名: 看護学生の職業レディネスに関する縦断調査. 千葉県立衛生短期大学紀要 26. 99-104 (2008)
- 39) 高橋美岐子, 藤沢緑子, 佐藤孝司, 村上照子: 日本赤十字秋田短期大学介護福祉学科卒業生の在学中の学業への取り組み、教育・学生生活に対する満足度、及び卒後の自己啓発—卒業生の動向調査から(その1)—. 日本赤十字秋田短期大学紀要 12. 61-71 (2008)
- 40) 高山清美: 看護学生の主体性を育む教育方法とは—指導者側と学生側の認識の差異をめぐって. 看護展望 33. 1112-1118 (2008)
- 41) 田島朝信, 坂梨京子, 千場直美, 寺岡祥子: 女子大学生の避妊に対する認識と性行動における主体性に関する研究. 熊本県母性衛生学会雑誌 6. 41-51 (2003)
- 42) 兎澤恵子, 高木タカ子, 保坂由美子, 吉岡敏子: 看護系大学生の災害時生活体験における学習効果に関する研究. 群馬パース大学紀要 4. 541-549 (2007)
- 43) 津田智子: 看護技術修得の初期段階にある学生の指導過程に関する研究—校内演習の個別指導を通して—. 鹿児島大学医学部保健学紀要 15. 11-19 (2005)
- 44) 辻岡秀美, 沖野良枝, 大山由紀子, 皆川美代子, 徳川早知子: 看護学生の臨地実習における態度に関連する要因と体験による変化の分析(第1報)—アイデンティティ形成とストレス対処能力の視点から—. 日本看護学会論文集: 看護教育 34. 20-22 (2003)
- 45) 辻野朋美, 山口智子, 上野範子, 緒方巧, 矢野正子: 初回基礎看護学実習レポートの分析(その2)—看護職者としての資質に関連した学び—. 藍野学院紀要 21. 23-33 (2007)
- 46) 吉野由美子: 疑似患者体験を取り入れた学習に関する教師の教育観の検討—排泄に関連する単元において疑似患者体験を取り入れたことのある教師の教育観の比較検討から—. 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設年報 12. 1-10 (2002)
- 47) 吉岡一実, 片岡智子, 中西貴美子, 樋廻博重, 石井八恵子: 学生側評価による基礎看護学実習の学習効果—看護概念の拡大に影響を及ぼす因子. 看護教育 41 (10). 866-871 (2000)